

精神科療養病棟入院患者の退院計画にはロコモが影響する

【研究背景】

精神疾患患者の社会復帰は世界的に重要な課題である。日本では精神科病棟を退院した患者の平均在院日数（LOS）が277日と長く、精神科療養病棟では入院患者の約8割が1年以上の入院となっている。精神科入院患者のLOSの長期化に影響を与える要因については、様々な研究で検討されてきたが、身体機能とLOSの関係性を分析した研究はほとんどない。本研究では、身体機能の指標としてロコモティブシンドローム（ロコモ）*に着目し、精神科療養病棟において退院を妨げる要因を明らかにすることを目的とした。

*ロコモとは、運動器の障害のために移動機能の低下をきたした状態で、ロコモが進行すると将来介護が必要になるリスクが高くなります。

【対象と方法】

3施設の精神科療養病棟に入院している203名の患者のうち、杖なしでの歩行が可能であった74名を分析対象とし、退院予定先が決まっているかどうかにより、退院決定群（27名）と退院未定群（47名）に分類した。調査項目は、年齢、性別、精神疾患、在院期間、抗精神病薬使用量、ロコモ度テスト（立ち上がりテスト、2ステップテスト、ロコモ25）、Barthel Indexとし、退院を妨げる要因を明らかにするための分析を行った。

【結果】

LOSと2ステップテストが退院先を妨げる要因であった。LOSが10年以上の場合は、LOSが2年未満の場合と比べて8.4倍、退院先が決まりにくくなり、2ステップテストがロコモ度2の場合は、ロコモ非該当の場合と比べて10.6倍、退院先が決まりにくくなるという結果であった。アンケートの結果、退院予定先が決まらない理由としては、入院期間が長い、生活能力が低い、地域に精神疾患患者を受け入れている施設が少ない、家族が退院を受け入れないなどが挙げられた。

【結論】

本研究では、精神科療養病棟入院患者の退院予定先に影響を与える要因を明らかにした。その結果、LOSが長く、2ステップテストの結果が悪いほど、退院先の決定を阻害することが明らかとなった。

【謝辞】

本研究にご協力いただいた平川病院、秋津鴻池病院、メープルヒル病院のスタッフの皆様に感謝いたします。

【本稿はPhysical Therapy Researchに掲載された以下論文の日本語要旨である】

Munetsugu Kota, Sae Uezono, Yusuke Ishibashi, Sousuke Kitakaze, Hideki Arakawa. Relationship between whether the planned discharge destination is decided and locomotive syndrome for admitted patients in psychiatric long-term care wards. Phys Ther Res (Advance online publication). 2020.